

海水浴

神野麻郎

中国道から舞鶴若狭道に入ると道路はだいぶ空いて走りやすくなった。後部座席の子供たちは、両親の顔色をうかがいながらひかえめにはしゃいでいる。助手席の友恵は朝からずっと口数少なく、怒ったような顔をしている。それは道路の周囲に移っていく山々や田んぼのほがらかな景色といかにも不釣り合いなくあいだと栄治えいじは思った。

昨夜、また口げんかになったのだった。栄治が久しぶりに同僚と飲んで足がもつれるほど酔っぱらって帰ってきたのが友恵の癪に障った。

「あんた、そんな飲み歩くお金がようあるなあ。どっかにへソクリ隠しとんどちやうか!」、「なにゆうてんねん。たまの一杯くらいええやないか!」と始まってしまったわけだ。

半時間ばかり、子供たちに聞こえるのもかまわず台所で口汚くのしりあつた。友恵はこごころの家計の苦しさを訴えた。それは栄治の稼ぎの少なさへのあからさまな攻撃になった。世の中の長引く不況のために栄治が長年勤める各種機械関係の小さな事業所でも年々受注が減り、社長の方針でリストラこそまだないものの、工員は自宅待機の日が増え、残業もほとんどなくなった。ここ数年は年二回のボーナスも雀の涙ほどだ。友恵のスーパーのパートの稼ぎを加えても四人家族の月々の生活はかつかつで、なにか臨時の出費があれば赤字になった。子供たちが成長してきて、やがて習い事の二つや二つもさせてやりたいのだが、唯一頼みの預金も心もとない。

口論は、結婚したのが間違いやつた、とか、ほな離婚せんかい、とかまでエスカレートしたが、最後は二人とも怒鳴り疲れてしまった。相手を難ずる言葉を考えるのも面倒になった。

「そんでパパ、ママ、明日、海行くん? 行くんやろ?」

親たちが顔をそむけあつて無言になった時、姉の祐真ゆまが寝室から顔を出してぼつんと訊いた。眠たげな顔の弟けんしの健之も姉の後ろで両親のほうをうかがっている。不意を突かれたように親たちは子供たちの顔を見まもった。夏休み中で暇を持て余している子供たちに、明日、天気さえ悪くなければ、久しぶりに一家で日本海へ海水浴に出かけようと十日も前から約束していたのだ。親たちが口げんかの勢いで、行かない、と言えば、二人とも大泣きしそうだった。

「行くで。行くゆうたやる。二人とも早う寝なさい」、友恵が仏頂面はそのままにおし殺した声で答えた。

友恵はもう夫のほうは見ず、乱暴に冷蔵庫から缶ビールを取り出し、アテもなしに黙って一人でぐいぐい飲んだ。そして子供たちの寝ている部屋に入って寝た。それでも朝は早く起きて四人分の弁当を作った。スマホで調べると行き先の天気予報は「曇り時々晴れ一時雨」

でなにやらわかりにくいですが、まずだいじょうぶだろう。栄治も身体が重かったが早めに起き出し、昨夜のことにはふれず、黙々と TENT やらクーラーボックスやら、遠出の準備をした。出発まで子供たちは時々ハイになってはしゃいだが、うるさい、用意が遅いとママに叱られた。家を出て高速道路に上がると乗用車で混んでいた。夏の休日の朝で、自分たちと同じように子供連れで都市からどこかの田舎に遠出をする家族が多そうだった。

景色が山がちになったころ、「ねえねえ、「三つのことば」やろ」と、五歳の健之が言い出した。「やろやろ」と七歳の祐真がすぐに応じる。「三つのことば」とは、三人が別々にある言葉を考えてそれを順番につなげ、「○○が、○○を、○○した」という文を作る遊びで、正式な遊びの呼び名は知らず、家族の誰かが名づけたのだ。このごろ健之が家族で車に乗るとこれをやりたがる。

「ママ、ねえやろうよ、三つのことばやろうよ」と二人は口々に訴える。

「やらへんよ」、ママは正面を向いたまますげなく言った。子供たちはこんな遊びにはパパが乗ってこないのはよく知っているので、しかたなく、

「健之、二人でやろ」「うん」と二人で始めたものの、「○○が、○○した」では子供にも単純すぎておもしろくなかった。

見かねてハンドルを握っている栄治が、

「パパもやろか？」と言ってやった。

「え、パパも？」「うわあ、やろやろ」と二人。

初めは健之が「○○が」、祐真が「○○を」、パパが「○○した」に決めた。健之が「みな、いい？」と訊き、二人が「いいよ」。健之が、「山が」、祐真が、「浮袋を」、パパが「壊した」。

「山が、浮袋を、壊した」。三人が笑った。次にできたのは「船が、色鉛筆を、飲んだ」、次は「コマが、空を、飛んだ」。みなおもしろかった。順番を替わって、祐真が「カラスが」、パパが「田んぼを」、健之が「こけた」。

「ケンはおかん。順番交代！」と祐真。健之はまだ自動詞と他動詞の区別がつかないのだ。役割を変えて続けているうちに、パパ、健之、祐真の順でいちばんおもしろいのができた。

「カーテンが、先生を、殺した！」。三人が笑った。ママもつられてちよっと笑ったようだった。

サービスイリアに入って、二人ずつ男女に別れてトイレをすませた。施設の中はけっこう混みあい、やはり家族連れが多かった。ママから少し小遣いをもらい、売店で祐真はガムを、健之はキャラメルを買った。車の中で二人は言い合いをしながらそれらを少しずつ交換した。

インターチェンジで舞鶴若狭道から分かれるとトンネルが多くなった。そのうちに小雨がフロントガラスを濡らした。空は灰色で、風も出てきたようだ。

「泳げるかなあ」と祐真が不安がる。

「だいじょうぶや」と栄治は言ってやる。小雨くらいなら海には入れる。問題ない。海近い町で育った栄治には海水浴のことはよくわかっているという自信があった。

有料道路を下りてから二つ三つの田舎の町を走った。もう川は北のほうに向いて流れている。川原にたくさんの灰色の鳥が飛んだり止まっていたりして、栄治が「サギや。見てみ」と言うが、子供たちはもう景色よりも「腹へったあ」とくり返し訴え、「もうちよつとがまんしい！」とママに叱られている。朝が早かったのだしかにみな空腹なのだ。子供たちが収まらないので、「これでも食べとき」とママは袋からバターロールを取り出した。「あんたもいるか?」「おお」と栄治も口にバターロールを銜えた。

カーナビどおりに走っているつもりが、小道に迷い込んでしまった。平地からジグザグ道の小山を一つ越えると湾が開け、そのへりを巡るように走ってようやく目指す海水浴場にたどり着いた。来る道ではあまり車に出会わなかったのに、浜の前の駐車場は混んでいた。京阪神のナンバープレートが多い。浜から遠い場所の、背の高い二台の車の間になんとか軽自動車を入れた。

四人で荷物を分け持って浜の方に歩くと、右手に一軒だけ海の家が開いていたが中にはいなかった。でも浜にはもう数十も、色とりどりのテントがずらっと並んでいる。昔と違ってこのごろの海水浴場では簡易なテントを持参して張るのがはやっていているらしい。日除けにも荷物置き場にもなり、中で着替えもできる。金を払って海の家を利用する必要もない。栄治は家族を従え、テントを張るのによい場所を探して砂の上を百メートル近くも歩いた。場所が決まると、子供たちは荷物を置いて早速歓声を上げながら波打際へ駆けて行った。海は青く澄んで、寄せる波は小さい。去年の夏一度使っただけのテントを張るのに栄治はやや手間取った。見てられん、というふうに友恵が手伝った。張り終わると三方に風を通し、子供たちを呼んで、クーラーボックスの中から弁当を取り出した。弁当は冷え、ご飯がごわごわした。

ゆるやかに湾曲しながら砂浜が数キロも続いている。空は雲がちだが晴れ間も見える。景色を眺めながら栄治はこの浜には昔一度来たことがあるような気がしたが、記憶はあいまいだった。でも日本海に面するこの辺の海水浴場には仲間数人で来て、泳いだり飲んだりしてはしゃいだおぼえがあった。勇気をふるって、水着の女の子たちに声をかけたりもしたものだ。あのころはまだ独身で、気持ちに屈託は少なく自由だった。でも今はどうだ? 子供たちはいとおしく、家族があるのは嬉しいが、人は歳をとると苦勞を背負いこむものだと思った。

浮袋をふくらませてやると、子供たちはそれをつけて海に入ってしまった。テントの中で着替えた友恵は、海に来ていくらか気も晴れたか、子供たちを追いかけていつて笑顔を見せている。結婚前も二人で何度か海に行ったが、学校の水泳部に属していたこともあるという友恵はなかなか達者に泳ぐのだ。

栄治も着替え、海に入ってみると、浅い所の水温はぬるい風呂のようだった。水は透明度が高い。遠浅の海岸で、高い波は寄せてこない。

祐真は背の立たない所に浮かび、手足をばたばたやって喜んでいるが、健之はといえば波打ち際からいくらか離れていない所で浮袋をかかえながら波をにらんでいる。去年の夏に

行った和歌山の海岸で、乗っていた小さなビニールボートが波にひっくり返され、水の中に落ちてあわあわした、辛い潮水も呑んでしまい大泣きした、そのことがどうやらトラウマになっていているらしい。車の中でも「浜は好きやけど泳ぐのはいやや」とぐずっていた。栄治は、「ケン、だいじようぶや。お姉ちゃん見てみ。あんなふうに浮いて手えも足もバタバタしたらええねん。こっちへおいで。パパがだっこしたる」と少し深い所に導こうとするが、健之は「いややー！」と怯えた犬ころみたいに後ずさる。友恵が寄ってきて、さとすように健之に教えた。

栄治は浜に戻り小さなビニールボートに空気を入れ、海に入ってから後ろ向きにそれに腰を入れた。そうすると浮袋に身体が乗っているように仰向きの楽な姿勢になれば、両手を櫂のようを使うと進んだり回ったりもできる。その恰好で三人から少し離れた沖の方に出て、脱力してただ波のまにまに浮かんだ。何年か前から気に入っているスタイルで、浮輪で泳ぐのはちがいが海面に寝ころんでいるようにリラックスできる。身体は半分水に沈んでいるので日に照らされても暑くはない。

浜に向かって右手の方の海にたくさんの人が散らばっている。左手の方にもまばらにいる。やはり親子連れが多いようで、母と子、父と子、父母と子供一人、二人、三人。ジイジやバアバもいる。それぞれの家族に不幸不運や生活の苦労が多少ともまつわっているにちがいないが、ともかく今の今、ここでは大自然にやさしく抱かれる感じで、みなのかかに楽しそうにやっているように見えた。自分の家族もそこに混じっている。給料の少なさ、首切りの怖れ、上司とのぎくしゃく、子供たちの教育、妻との関係、羽振りのいい知人への羨望、自分の弱気、将来の暮らし向きへの不安、などなど、ふだん自分の頭を占めていることどもが、さほど大したことではないように感じられた。自分は、自分の家族は、生活は決して楽ではないけれども、まあみなで力を合わせてここまでよくやってきたのではないか、将来もなんとかなって行くのではないか、などとも思われた。不景気続きで給料が上がらないといっても、少子高齢化で国の先行きは暗いといっても、みななんとかそれなりにやっているようではないか。

三十メートルほど離れた所から祐真が白い歯を見せて栄治に手を振っている。子供たちも大きくなったものだ。祐真がまだ一歳のころから、家族は毎夏一度はどこかに海水浴に出かけることが習慣のようになった。高速道路代、ガソリン代、駐車料金、食事代と出費はかさむが、それだけは、いやそれくらいはと思っただけで出かけてきた。波打際で歓声を上げながらよちよち歩いてきた祐真を栄治はついこの間のことのように憶えている。やがて同じように裸のままよちよち歩く健之が加わった。

「パパ！ パパ！」と岸辺のほうから大声で祐真が呼ぶ。

「ケンが泳げるようになったよー！」

戻ってみると、友恵が熱心に教えたのだろう、浮袋の健之が手足をばたばたやっている。砂の底から両足が離れている。満面の笑みだ。一段階進んだのだ。

「おおケン、泳げるやん。エライよ」と栄治も声をかけた。

「パパ、ケータイ、ケータイ。ケンのあの恰好、撮ったりよ」とママに促され、栄治はテントに戻りスマホを持ってきて、動画と写真両方で三人を写した。

海は温かく、「泳げる」ようになった健之も祐真も、なかなか上がろうとしない。でもそのうちに日がかげり、西のほうから大きな黒雲が向かってくる気配だった。黒雲の下の海がけぶっているのは雨を連れているのだろう。栄治が声をかけて、四人はテントに戻った。クーラーボックスからタッパーに入れたスイカの切り身を出してテントのまわりで種を吐きながら食べた。これも毎夏のこと、スイカは二、三日前スーパーで小玉を買ってきたのだ。海でしょっぱくなつた口には甘さが格別だった。

食べているうちに風が強まり、ぱらぱらと雨粒が落ちてきた。黒雲はもう大きな傘を開いたように上天を覆いだしている。四人は急いでテントの中に逃げこみ、三方の口を閉じた。あたりの人々も多くがあわただしくテントの中に逃げこむか、車の方に避難するかするよ

うで、見る間に海には誰も見えなくなった。浜は急に空いた。大粒の雨になった。突風がさつきまで泳いでいたあたりの海面を白く刻む。遠雷まで響いてきた。

「車に行かんでもええんか、パパ」、ママが不安がる。

「ええんや。ここで待つとつたら、すぐに止むで」

しかし十分近く経つても風も雨脚も衰えず、小さなテントは大量の水を浴びながらしな

5

つて今にも吹き飛ばされそうだった。さすがに栄治もちょっと弱気に、不安になってきた。自分一人ならまだよいが、家族を、子供らをこう怯えさせてよいものか。強い風雨のただ中

で、ほんの一枚の薄い生地を隔てをたよりに、四人は砂浜の上にならずくまっているだけなのだ。わずかな隙間から外をのぞいていると、目の前を誰かの浮袋がすさまじい勢いで風船玉のように飛んでいった。テントまで、一つ二つと羽を広げながら砂の上を転がっていった。

気温が急に下がり、濡れた身体は冷えてきた。子供たちにはバスタオルを巻いてやり、祐真はママが、健之はパパが膝に抱いた。

「うちら、運が悪いなあ。こんな日に海に来るやなんて」、ママがしょげている。

「なあーんも。これくらい、ええおしめりやないか。反対にカッカ照ってみ、それこそ砂漠みたいに暑うてかなんで」

栄治はなお虚勢を張った。なあに、これくらいなんとでもなる、あわてることはない。だが雨に刺される海面が荒れた皮膚のように見えて不気味だった。少年時代にも浜で何度か同じ光景を見たような気がした。

もう外に出るほうが危険で、ただ風雨が過ぎ去るのをそうして待っているしかなかった。狭いテントの中に四人が身を寄せあつてじっと耐えている。これではまるで自分たちの暮らしのようやないか、とも栄治はふと思った。

鳴り物入りでやってきてひとしきり騒いだ黒雲は、しかし過ぎ去るのも早かった。あたりが急に明るみ、雨は空に帰っていくように上がった。「虹や!」という声が近くで聞こえ、

四人ともテントを出てみると、西の空の半分くらいにさっきまでの荒天がウソのように七色のループがあざやかにかかっていた。半島の山の裏側から出て中天で雲の中に消えている。「虹やー」と子供たちも興奮した。「撮って、撮って」と言われてママがスマホを向けた。栄治も安堵しつつ見上げながら、

「なんや、さんざん脅しといて、後には褒美くれたんやなあ。今日は天もアジなことするやんか」

友恵が、

「なに力んでるん、パパ。脅す、ておかしやろ。もつと気の利いた感想ないんかいな。あんなにきれえやのに」

「ほんまや、パパは」と笑いながら祐真。言われて栄治も両手で腰を伸ばしながらあらためて仰いだ。すると、この景色をみんなで見ただけでも今日ここに来たかいがあつたように思えてきた。

浜は濡れそぼっているが、日差し戻った海に三人はまた入った。あたりの人々も戻ってきている。友恵は雨風に乱されたテントのまわりを片づけた後、中に入って電話で誰かとしゃべっている。たぶん自分の母親だろう。栄治は、こんな所でまでと思うが、「健之が泳げるようになってなあ」とか「すごい雨に遭うてなあ、大変やったんよ」とか「雨の後にきれいな虹が出てなあ」とかたあいもないことを知らせているのかもしれない。

栄治は子供たちに海の中を見ようと誘い、ゴーグルをつけさせた。祐真はともかく健之がゴーグルを使うのは初めてだろう。自分が表演して見せながら、息を止め、海面に顔をつけて水中をのぞくやり方を教えてやると二人はわけもなく修得した。家の狭いバスタブで同じようなことをやって遊んでいたのが役立ったかもしれない。水中でジャンケンもできるんやと言つてやるとおもしろがり、浮袋から身体を乗り出してさかんにやりだした。そのうちに友恵も「なにやつとんのや？」とやってきた。

小嵐の後でも、海中はきれいだった。栄治がゴーグルで見ているとアジか何かの幼魚の群れが身体のをばを走つていった。砂の上に止まっているドンコのようなものもある。それも子供たちに教えてやった。

ところが、そのうちに祐真が、「あー！」と叫んで急に岸の方に身体を倒し、手足をばちやばちやさせて逃げていこうとした。

「どした？」と訊くと、

「クラゲ！ 刺される！」とこわがる。そばの健之もびっくりした顔になった。ママまで身を引いている。

栄治が見ると、ちょうど四人の間にけっこう大きな白いものが一つ浮いている。潜つてたしかめるとたしかにクラゲだった。でも足は短い。

「祐真、だいじょうぶや。こいつは刺さへんからだいじょうぶやな」

「刺さへんの？ ほんまに？」

「ほんまのほんまや。クラゲでな、刺すのは足が長いヤツや。こいつは足が短い。刺さへん。」

ようおるミズクラゲというヤツや。ほなけど手ではさわらんほうがええで」

「ああ、そうや、ミズクラゲ。パパの言うとおりのや。いけるいける」と友恵も口を添え、それで子供たちは納得したようだ。

栄治がもう一度ゴーグルで見ると、ミズクラゲは一匹でなく、あたりに何匹も浮かんでいた。潮のぐあいで群れが寄せてきたのかもしれない。

刺さないとわかると、今度は子供たちはクラゲをつかまえにかかった。ママにテントから捕虫網とポリバケツを持ってこさせ、一人で競いながらいくつかのクラゲをすくい取って赤いバケツに入れた。三人でそれを波打際のほうに運んでいった。クラゲの遊びはしばらく続くようだ。

そのうちに日が傾いてきた。浜では人々がぼつぼつテントをたたんだり、シャワーの施設や駐車場の方向に歩いたりしている。「そろそろ帰るか」と栄治が声をかけると、子供たちは「まだいる」となかなか海から上がろうとしない。それで夫婦で話して、栄治がまずシャワーを浴びて着替えてきて、後で友恵が二人を連れてシャワーに行く、その間に栄治がテントを片づける、という算段にした。

浜の入口付近に、左手に海の家、右手にシャワーやトイレ、更衣室のある施設が建っている。栄治が施設のほうに行くのと数人が並んで順番を待っていた。海の家のようにまわっていると、温水シャワーの個室が並んでいるが「使用料三分二百円」と書いてある。誰も使っていないようだった。「世の中不景気やからな、みな始末なもんや」と栄治はつぶやきながら、自分も施設の方に戻って待った。十分ほど並んで番がきた。

テントに戻ると、「あんた、遅かったなあ」と友恵が難ずるように言う。荷物はもうテント以外きれいに片づけられていた。子供たちはまだ水着のまま、波打際で砂山を作って遊んでいる。栄治は友恵にシャワーに有料と無料があることを説明した。友恵は二人を呼んで、着替えなどを持ち、三人で無料のシャワーのほうへ歩いていった。

軽自動車は来た道に戻った。子供たちもさすがに疲れたのか、言葉数少なく座席にもたれている。町に入り、川沿いにさかのぼったが、トンネルの多い片道一車線の有料道路に入ったところで急に進まなくなった。渋滞の車列は前方に長いようで、それから半時間も止まったり、のろのろ走ったりした。スマホで道路情報を探ってみても原因はわからず、助手席の友恵は、

「おかしなあ。こんなところでこないに混むはずないやろになあ」

「前のほうでなんか事故、あったんやろ。まあ、そのうち走れる」

「そやけどおなか空いてきたで。なあ」と友恵が後部座席を振り返ると、二人とももう口を開けてふねをこいでいる。姉と弟、寝顔はそっくりだ。

「サービステリアに食べるとこあるやろ。そこで食べていこ」

長かった夏の日もようやく暮れていき、道路には赤いテールランプの列が並んだ。

「あんた、今日はまあ来てよかったなあ。この子ら、嬉しそうやった。ケンも「泳げる」ようになったし」

「ふん、ケンはあるでほんまに泳げたと思とんやで。浮袋しとんのすっかり忘れとるで」
二人は笑った。

「ええ浜やったなあ。遠浅で、波も小そうて。来年もまた来よか」と栄治が言った。
「そうやなあ。天気さえよかつたらな。二人とも年々大きくなっていくなあ。海に来たらそれがようわかるわ」

「ほんまや、ようわかる。……明日ママは朝から仕事か？」

「そうや。子供ら、預けなあかんなあ。ケンは嫌がつとるんやけど。……ああ、また今月も学童と保育所の払いでいぶ飛んでいくわ。しゃーないけどなあ」

それらがいくらかかかると、二学期からは祐真には器械体操、健之にはサッカーを習わせたのだがどうしようか、という話になっていった。

のろのろ動いていたのが、ある所からは急に前の車がスピードを上げた。

サービスイリアのパーキングに車を停めると、すっかり寝込んでいた子供たちを起こした。祐真は目をこすりながらも一人で降りたが、健之はクラゲのように力が入らず、栄治が抱き上げ、施設の前まで運んだ。

建物の中に入るとけっこう混んでいた。施設の左端にあるレストランの前で四人並んでサンプルケースをのぞくと、定食は千五百円前後のものが多く、栄治はちょっと高いな、でもこんなもんかな、と思った。山がちの内陸らしくソバと山菜がこのあたりの名物らしい。ようやく目が覚めた空腹の子供たちは、これにする、あれがいいと指さした。店内に客の姿は意外にわずかで、空いている。そのままフードコートの方に行ってみると席はだいぶ埋まっている。栄治はここでも、「世の中不景気なんや。みな始末しよるなあ」とつぶやいた。

「ここでウドンかソバ食べよ。ソバがこの辺の名産らしいで」と友恵が、空席を目で探しながら三人に言う。子供たちはやや不服げだ。

「いや、ママ、あそこのレストランでゆっくり食べよ。今日はそうするで」

フードコートの客たちを眺めているうちに、栄治はふとそんな気になった。

「もったいないやんか。四人でいくらかかると思とん」

「たまにはええやないか。うまいもん食べよ」

子供たちは喜んで、さっさとレストランのほうに小走りしていく。

「なんでなん？ 高速代も高いのに」

「お祝いや」

「なんのお祝い？」

「なんやわからんけど、お祝いや」

「もう、わけわからんわ。しゃーないなあ」と文句を言いながら、友恵も定食には惹かれていたようだ。

空いているので席にはすぐ案内された。渡されたメニューを見て、四人それぞれ別の定食に決めた。子供用の椅子に坐った健之までが一人前に定食を注文するのだ。「ケンが残すに決まっとうから、ウチはやめとくわ」と言っていた友恵も、「これおいしそうやなあ」と結

局一つ選んだ。栄治はウエイトレスを呼んで注文し、「ビールも一つ頼むわ」とつけ加える
と、もう老年に近いウエイトレスのおばさんは、ものなれたふうに、

「ビールは置いてないですよ。高速道路ですから。ノンアルコールならありますが」と答
えた。

「へえ。ああ。そんなら、ノンアルコールのを一つ」

ウエイトレスが去ってから友恵がおかしそうに、

「パパはアホやなあ。高速でビールを注文する人がいやはるか？　なあ」

子供たちも笑った。

「クルマ運転するのに、パパ、お酒あかんやん」と健之までが小さな口をとがらせてとがめ
る。

まずジョッキに泡の立っている本物のビールそっくりのノンアルコールビールが来た。

栄治はそれを友恵の前に置いた。

「え、あんたが飲むん tochやうの？」

「ええんや。ママに一杯飲ましたる思たんや」

「そうかあ。パパやさしなあ」と友恵はちよつと照れた。

「ノンアルコールってどんなん？　飲みたい」と祐真が手を出す。

「ええで。ちよつと飲んでみ」

グラスを傾けて半口飲むと、「苦い」と祐真は顔をしかめる。

「ぼくも」と健之も口をつけ、姉よりもつと顔をくしゃくしゃにした。親たちは笑った。

その後は少し待たされた。一組の客が出ていき、残りは広い店内に自分たちのほかには二
組がいるばかりとなった。新たに entering 来る客はなかった。

やがてさっきのおばさんが「お待たせしました」と一つ一つ定食の盆を運んできた。祐
真は食器の並んだ四角の黒い盆が自分の前に置かれると「わああ」と喜ぶ。健之はまだ自分
の前だけ空いているのであせり顔だ。おばさんが笑って、

「ぼっちゃん、今すぐ持ってきますからねー」

テーブルの上に黒い盆が四つ並んだ。「いただきます」という声が重なった。窓の外は
もうすっかり暮れて、帰宅はだいぶ遅くなりそうだった。